《資料紹介》

獺越文助（みちつね）筆『文化五年伊世道中旅行記』(二)

佐竹昭

前稿に引き続き、芸州倉橋島獺越文助・通恒（みちつね）らの『伊勢道中旅行記』二種を翻刻する。前回は倉橋出立から大坂までであったが、今回は大坂出立から伊勢到着までを紹介する。前号に、旅行記の簡単な書誌と記主の紹介、および本資料翻刻の意図は述べたので、ここではこれまで翻刻した部分に限って、内容に即して若干の感想めいたものを記してみたい。

文助・通恒の旅行記ともにみられる特色は、その日程にも端的にあらわれているように、名所・旧跡を楽しむことが第一であり、旅先の町や村の生活についてはあまり関心を寄せていないことが指摘できる。一部、文助の奈良や大和郡山についての記述は、町の実情をよく伝えている面もあるが、基本は自分たちの見聞した名所・旧跡の覚えに尽きる。

次に、その名所・旧跡についてみると、相当たんねんに見て廻って記録していることが注意される。たとえば、明石柿本神社・大和当麻寺などでは案内人を頼んで詳細に見聞してメモしており、また奈良や吉野などにも多くの記述がなされている。その背景には、文助らの和歌への関心の強さ、あるいは浄瑠璃などを通じて得た知識の蓄積があり、旅行前にすでにある程度の知識を持っていた名所・旧跡を、実際に訪ねてみるという、そのような旅の性格を示しているように思われる。大和の古寺巡りなどは、現在でこそ多くの人々が訪れるが、かつては、一部特別な信仰をあつめた所を別にすると、荒廃にまかされていたわけで、喜光寺・法華寺・唐招提寺・薬師寺・飛鳥地方などまで巡歴していることも右と関連するのであろう。

また、これは庶民のなかにおける伊勢神宮に対する意識の一端を示すものであろうが、旅の目的地である伊勢神宮そのも

のについては、あまり親しみを感じていないようで、二人の旅行記の記述は驚くほど簡略である。文助は、伊勢山田の御師宅へ到着後、当分記述を中断して空白となっており、それまでの名所・旧跡への熱意はみられない。また通恒も、「神山ノコトハ心意得覚ス」と記し、他の参詣記にもよく見られるように、もっぱら御師宅での豪勢な食事のメニュー記録に終始している。文助らの旅の性格からして、あるいは当然のことかもしれない。

次に、文助と通恒の旅行記を対照してみると、文助は、案内記のある所はそれを購入して記述を略し、その他の名所・旧跡はかなり正確な用字でもって、文章として読める記録を残している。一方通恒は、村名や町名をはじめ名所・旧跡とその宝物に至るまで、至細にメモし、文助より二割程度多くそれらを記載しているが、その説明は断片的で、まさに現地での聞き書きという印象が強い。

以後、文助一行は草津を経由して京に出、比叡山へ登ったのち大坂へ、さらに高野山登山をはたして大坂へ戻り、十六日間も逗留したのち、ようやく帰国の途につく。その間、文助の旅行記には空白が多くなるが、通恒のそれはなおも途切れることがない。

この時代、ほとんど一文も持たずに伊勢に押し寄せる、おかげ参りの波状的な大流行をはじめ、物乞い同然の伊勢参宮も多かった。文助らの旅は、それらとは性格を異にするものであり、ある程度の教養を前提とする趣味的な旅であったが、芸南島嶼部の一有力者が、女性も含めて総勢十六名で行っていることからすると、そのような旅もすでに全国的な市民権を得つつあったことが想定される。このような趣味としての観光旅行の成立は、各地の名所・旧跡の成立を促進し、その故事をめぐるまことしやかな伝説の創作が澎湃として湧きおこることと対応する。これまで翻刻した部分でも、各地の『名所図絵』などにない旧跡・故事の記録がみられ、当時の名所・旧跡成立の実態を考えるには、著名な地誌の記載だけでなく、旅行者の歴史的性格をふまえながら、旅行記などをも活用するべきであろう。

さて、伊勢出立以降についてはまた次の機会に譲るとして、前号同様、上段に通恒、下段に文助の旅行記を翻刻する。本資料所蔵の尾曽越文亮氏、倉橋町教育委員会、および本学部日本研究講座の先生方に、重ねてお礼申し上げるものである。

〔上段〕通恒の旅行記

大阪出立

六日 大坂出立。玉造弐軒茶屋ニ依り休息ス。九ッ過キみくりや(御厨)村、其次ハ此村ニくすで(楠根川)川アリ。其次ハしんけ(新家)村。夫より大坂より三り参、河州松原四条屋伝右衛門方へ宿ス。

平岡

七日 平岡大明神へ参詣、甚古社ナリ。夫よりくらかれ峠、過半ニ及西を望ミ見れは大坂の城眼下見下、甚野辺も広ク、夫よりくらかり峠茶屋ェ依り休。夫より尾瀬村、夫よりモロノ木峠休息ス。畫、おいわけ角屋善九郎茶屋。夫よりスナ茶屋。夫より蓬来等アリ。夫より菅原天神様へ参ル。閑(館)ニ大自在、亦喜光寺トモ云。ソレヨリ西大寺へ参ル。夫より弘法大師ノ井川の水を呑。腋路堂アリ、夫より奈羅へ参り、小刀ヤ善助方へ宿ス。

くらがり峠

垂仁陵

喜光寺

西大寺

奈良

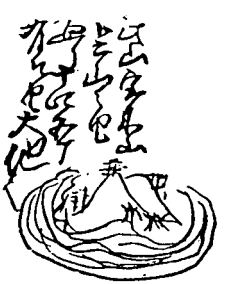
八日 なら名所。サル沢ノ池アリ。是ヘウネメノ舞身ヲナゲ、ワキニ柳アリ、ソレヘ十二ヒトエヲカケオカレシ柳ナリ。春日祭礼霜月廿七日、七大名様参詣。一の春日鳥居、弐かイ半、五百石鹿ノ食ニ付。イノ木大明神の社を春日様へうり被成、シュン(俊乗坊)長坊大佛ヲ建立ス。御手ウズ北ノ川ト云。弐ノ鳥居、是より下馬、若宮へ参詣。ワキニ唐松・五陽ノ松アリ、神主福井右仲ト云。春日奥ノイン。ワキニねギ衆ノ道アリ。カスガノ宝物焼所ニ石アリ。夫より御本社

春日大社

〔下段〕文助の旅行記

五月六日 昼頃浪華宿挺屋七兵衛方出立。同泊り松原四条屋伝右衛門へ、道々村々多し。

同七日 同所出立、朝六半時、くらかり峠の麓に平岡ト云村有リ。此処ニ春日社有リ、河内国一ノ宮ト云印有リ、参詣いたス。甚古所と相見ル。所人に尋候へばならの本宮ノ由答ふ。社も古び、近頃詣る人も見へず、古めかしき所也。むろ木なと大木有り。夫より谷伝ひにて峠へ登ル。峠の茶屋大和屋長右衛門処へ休ム。はなれ座敷の庭ニさつき盛り成り。夫よりおセ(尾瀬)にて休ム。其次むろノ木ノ峠ノ茶屋ニて休ム。夫よりおいわけ茶屋（角屋善九郎）ニて昼飯したためル。七・八丁下り池有り。夫よりスナ茶屋。



此山宝来山ト云山之由、廻り十四・五丁有ル由、大地也。

夫より菅原ト云所有り。此所菅相丞誕生之地之由ニ

詣ス、尤四社アリ。宝物蔵アリ、御クウ所アリ。梅木アリ、是ハ春日様御出ノ節、此山ニ木ナキニ依リ植ラレシ梅ナリ。尤千七百年ニ成。フモトニ十三ニ成子、鹿ヲ殺シ、依テ石スメニ被致事アリ、既ニ妹背山浄ルニ(リ脱カ)アリ。水屋ゴウズ天王下向水屋、茶屋依リ休ス。刀ナタメシノ石アリ。手向山ニ八幡アリ、人皇后(神功皇后)皇八幡又八幡様御腰かけくづレし石アリ。光照院シン鬱ノ生シ処アリ。キサラギノ瀧アリ。

東大寺

三月堂、二月堂、尤此堂ハてふつ火ヨケ十四軒四面、二月十二日ワカサ〳〵〳〵三度唱レバ水湧ナリ、此水ヲ載ス。四月堂ロウベン杉アリ。大佛(殿)三十弐間、十六丈、五丈三尺長ケ、手一尺一寸(ママ)。金八部から(大佛)金八部東金堂、花ノ松、大日如来カマタラウ建立、食堂アリ。高福山南臺門(興福寺)。春の日は　南円堂に　かゝやきて　みかさのの山(ママ)ニ　はるゝうす雲。南円堂白藤・ならの都の八重桜見る。福円堂(北)ミロクボサツ。

興福寺

西の京

九日　ナラ出立。招提寺参詣。クラマ桜・孤山松、盧舎那佛・薬師如来・千手観音、宝蔵弐所、璃珠宮、西の京。ほうりう寺カラン見物、西円堂薬師如来。(△)達磨石、飢臥邏蹤、春日石アリ、大子石、賜歌高跡、エン給ノ竹アリ、前ニハス池アリ。△(此分前ニ有)龍田大明神松並村ニアリ、又龍田川の船乗ヲ見る。王寺村月見橋ヲ渡り達磨寺へ参詣。

法隆寺

妹背山婦女庭訓

て寺有り、喜光寺と云寺也。天神之社有り。飛梅玉垣結廻し中ニ五葉ノ松鉢植ニ有り。御直作之御神像も有之。夫より西大寺へ参ル、大寺也。本堂ハ十五間四面、中庭ニ御玉屋有り。本ノ右脇御祈祷所有り、此寺之坊と相見、四・五軒有り。本尊ハ愛染明王之由。夫より法華寺へ参ル。此寺ハ至而古寺と相見候へハ住みあらし、漸々堂番と相見者共両人也。本堂の前ニ池有り、廻りにかきつはた□□さく。本尊ハ観音、脇立不動・相染、諸堂多し。夫より南都へ出ル。町内ハ至而さひしき処也。何ヲいたし住候所かや、振々敷商売致者相見へ不申。漸々さらし、すみなどいたスのミと相見ゆる。

春日社(同八日脱カ)一ノ鳥居、夫より二鳥井、若宮社。相生松ノ唐松(唐葉落、春めヲ出ス)、五葉松。奥ノ院、春日社天宮壱間半ニ弐間位社也。鳥井有前ニ休所有り。らうへん杉。若さ井。二月十二日後夜。三月二月四月。南都之方ハ名所記ニ有、依略之。

九日　小刀屋善助方出立。小大寺地中広し。本堂十四間四方、本尊盧舎那佛、右千手観音、左薬師如来、建物廻廊多し。宝蔵弐ケ所有り。左ノ堂ニて勤有り。出家高座ニ弐人、壱座ニ六人。庭ノ脇ニからかねの手水鉢有り、中ニヒキ有り、夫之口より水出ル。夫より西ノ京と云所ヲ通ル。寺数多シ、不残寺

下向たはこや次兵衛方へ宿ス。

十日　出立。下田村へ休ス。蔵王権現・金剛セン東南ニアリ。カツラキ西ニアリ。染井寺、エンキョウ（役行者）シャ植シ桜アリ。中将姫ノ桜、十七才ノ御顔アリ。糸かけの桜。キシウヒバリ山。なか〳〵に　山のおくこそ　すミよけれ　くさきが人の　とがをいワねバ

ソノ道ニ庚申社アリ。四つ過たへま村ふちや平三郎茶屋へ休ス。夫よりたへま寺へ参詣、案内ヲトリ行。鎌倉ヨリトモノ寄進ナリ。中将姫ヲマンダラヲサタシ御堂ハ　□□とそとりあやしかゝり　つか□□ちくをおりあらハしてまことをそしる。まりこ山、たへま寺ハ六町四方全山。

女人高野アリ、大師の杖立ノ井アリ。ハスノ糸にてヲリシヲマンダラ壱丈八尺。五シャ明神、是ハ馬ノ社ナリ。蓮糸寺テズダイシ。糸ハ四十四ザ。豊ナリノ姫。三尊ミダ廿五人天竺より迎ニ御出之節ノミタナリ。

當麻寺。総本山知恩院、本堂最初本尊円光大師御自作、四十八度御開眼、血乗御影。日本石燈籠ノ初ハ當麻寺ノワキニ有リ。熊野権現ノ休石アリ、又ワキニコン堂（金堂）・香堂（講堂）アリ。中将姫剃髪寺アリ、其寺ニ実

町也。薬師寺へ参ル、甚大破いたし相見ル。本堂之本尊シヤクトウノ薬師如来也。脇立同様十一面尊・地蔵尊也。夫より表門へ通り社有り、八幡宮也。此寺之鎮守共歟。此寺之ガクニ瑠珠宮ト金の閣（額）也。禁裏御祈祷所と云書附之箱有り。

夫より郡山城下へ出ル。北東より入、町大門ノ前ノ茶屋ニて休ム。西南へ出ル、又町はつれの茶屋ニて休ム。此所ニて茶屋〳〵より茶屋数多出テ引留ル。茂作、弐人の女にとらへられ、甚込り既に其所ニて昼飯いたさんと思ふ心持見ゆる。万五郎参ル。茶屋の女ヲしかりふり切テ通ル。夫より小泉へ出ル。此処ニ一国一庚申有り。寺ハ只今普請中也。大青面尊へ番僧日中之御供備ルヲ見ル。

夫より法隆寺へ参ル。凡道のり卅丁程有り。法隆寺之景題（境内）、記ニいとまあらす。依之此処ニて旧記宝物之書物ヲ調、是ニ委敷記有り。但し聖徳太子十六歳ノ御すかたうつさせ給ふ池有、名付テ御すかた見の池と云。此脇ニ楠の古木有り、名付テ大枝木ト云由。是ハ此寺へ御座被成給ふ時、長柄ニつかセ給ふヲ、此寺佛法相応之地ならバ枝葉繁へよと仰られてさし給ふ。夫より枝葉しけり、今ニ枯木より枝葉生也。此木かたわれ上ノたいしニ有り、是ハさかしにさし給ふニよりさかさまに枝葉生たるよし。

雅法印ノ弟子ニナラント誓ノ石アリ。是ハ姫ノ石ヲフンデ跡トツカバ弟(子脱カ)トナラント云テ跡マレシ石穴アリ、又西御堂トモ云。中将姫、奈ら大安寺ノ道、松捨アレバ姫トリ、當麻寺ヘ帰リ植ラレシ松アリ。是より毎年四月五日八つ時ハ姫ノ異母首ヲ日畫出シ元然ナリ。此松モタモト松ト云、又其日ハイマニ三尊ノ称陁(弥陀)廿五菩薩、中将姫ヲ天ジクヨリ迎ニ出ル体アリ。其時右ノ異母ノ魂魄イツル。此ノ時寺ノ前ヘより凡一町モアリ、コレヘ壱間四方ノ橋カゝリ口設アリ。善道大師念佛堂アリ。シナノ善光寺ノ写。聖徳太子ノ作ハ黄金佛アリ。

當麻寺ニ座敷見物、狩野ノ永徳画ケンソウ后帝ノ絵図アリ、是ハシズカノ舞ノブタイノ絵ナリ。コホウゲンノ画ニ唐ノ七帝ノ画アリ。法橋幽竹守興ノ筆ニ雲龍アリ。又同筆ニアシニカリノ画アリ。上品上シヨウ、此内ニ将軍家ノ霊碑アリ、屏風ニ一双ノ画ハ山水、ハセベ雲国ノ筆ナリ。當麻寺ニ竹アリ、姫ノ歌ニ、此竹に　さしもなにおふ　一夜竹　一夜とまれと　弐夜ととまらぬ。極楽を　いそくととへは　ゆめとなり　まりこのさとへ　行てたすねん　ミダレ〳〵トふたロいわれけれバ中将姫ノまゝ母ニ云スゝテ姫キエニけり。

一六町四方當麻寺へ金山ナリ、十ノ峯も金山ナリ。たへま　つほさか　おか寺　とふのミね

龍田大明神へ参ル、龍田川ヲ渡ル。夫より達磨寺へ参詣ス。たはこ屋次兵衛方へ宿ス。

十日　同所出立。下田村ニ而休ム。蔵王権現金剛山カツラキ山西ニアリ。

ケンソウ　カノウ永徳　七ミカト　コホウゲン　雲コク

染井寺へ参ル。此寺之前、中将姫ノマンタラヲ織セ給ふ糸ヲ洗染給ふ所ヲ染井ノ水ト云。今ニ小キ井アリ。中将姫之糸かけの桜ト云アリ。中々に　山のおくこそ　すみよけれ　草木か人の　とがをいわねばト読ミ給ふよし。

夫より当麻村へ入、ふもとの藤屋平三郎方へ休ム。夫よりたへま寺へ参ル。案内者雇ひ、ヲマンタラ其外諸堂座敷等拝見致ス。来光石ト云石有り。三尊廿五ホサツ毎クヲガマレタマフ、上の色ハむらさきノ様ニ相見へ、すかし見れハ金色ニ光りおかまるゝ也。

同十一日　とさ町。夫より同所つほさか寺へ参ル。十八丁登り本堂有り。本尊観世音尊也。夫奥院(より)へ参ル。毎々ク岩の面ニキサミ付タル石佛之皆々大師之御作ナル由。フモトノ茶屋にて休ム、甚深山幽谷也。夫よりよしの山へ参ル。つほさか寺の山より七

正八ッ、右ノふじ屋出立。新城村迄五十町。夫より五所(御所)迄五十町、同村ニ鯨ノ瀧アリ、麓より五十丁アリ。其所フドウアリ。御處町吉祥草寺第(子原)原山へ参詣。神変大菩薩母君ノ像アリ、本尊五大明王行者御作。庭ニ役ノ行者笈掛ノ杉ノ古木アリ。此処行者誕生処ナリ。高取上村スルカノ守土佐町角屋九兵衛方へ宿ス。當麻寺より是迄四里五十町。

十一日 前夜雨降リ、同雨降リ。夫よりツボ坂南無観世音菩薩参ス。ワキニ三重ノ塔アリ、南法華寺共云。夫より奥ノ隠へ行、上下二里程アリ。其山ヲ拝見レハ佛数三千部、其内高神モアリ、此皆弘法大師ノ一夜ノ御作ナリ。大師御歌に、岩をたて　水をたゝえて　壺坂の　庭ノ砂も　浄土なるらん。又石中水アリ、イツレより湧シレズ。夫壺坂ノ山後ロヲ通リ吉野道ニ行。四つ過。吉野麓前田ノ陀羅尼助ノ本家へ行、ショウ護院より許ヲ以天下ニ無二ノ薬ナリ。吉野川腋松屋弥平茶屋へ休食ス。夫より川ヲ渡リ登山ス。川副半町餘ニ及、其小石ノ白晒アリ美敷見ゆる。夫よりザ王観(権)現へ参詣。夫より薬師堂詣ス。夫より秀ヨリ。義経ノ隠れ松アリ。

丸鳥居、カラ金。七カイ半。壱丈弐尺、立弐丈五尺、ショウム天王(大塔)建立ナリ。十八間四面、蔵王権現。ツゝジ。王藤ノ宮舞桜、四本ノ桜ナリ。縁ノ行十弐丁南東ノ方へ下ル、クタリ付、よしの山麓越部ト云所也。此所前田屋ニてダラニスケヲ買、夫より町通りニ登ル。川ハタノ茶屋ニて昼飯シタゝム。名ハ松屋弥兵衛ト云。チョクシタシ　汁　かうのもの梅干菓子椀ほし大根・ふき・あけとうふ・小いも・御めし。夫より六田川ヲ渡ル。向合ひニ石燈爐・木とうろ有、向ニ六田の柳といふ柳あり、歌有り。川セン六文。夫より六田村ヲ登り、山ノ麓より桜の木道の両方ニ有り。山上ニハ町家多シ。寺坊三十六ケ寺有り。吉水院ニよしつね住ミ給ふよし。後タイコ天皇も同寺皇居之由申、左候へ共実ハ実乗寺ニ被為成御座候由。吉水院ハ花見の御殿之由、大塔宮住給ふ所有り。四方ニ桜有り、四もとの桜と申由。村上彦四郎宮ニかわり打死之処、今ノ二王門也。花やクラト云也。夫より上ニよしつねのタゝカイ給ふ前ニも花ヤクラト云所有り。是ハ三川カクハントよしつねノカハリニ忠信トタゝカフ、カクハン忠信ニイカケシ矢ノ根有り。是も宝物之由也。竹林院ノ庭、至而面白キ所也。是山より見ヲロシ甚以風景ヨシ。大金鳥居より凡四十余上、佐古屋平右衛門へ泊ル。

夕　朝

(十二日脱カ)夫よりよしの川ヲ渡り、向ひニいも山見ル。東武峯へ上ル、風景よし。宮・寺。夫より七十丁計下り、

壺坂寺

吉野

者ノ護摩堂、千躰地蔵、恵心僧都ノ作。如蓮寺(如意輪寺)、コタイコ天王墓アリ。子安地蔵ニ義経陣太鼓ノ輪七尺餘リ渡リナリ。吉水院ニアリ。金名竹、ゴダイゴ天王植。辨慶力針。義経駒足ノ跡。役行者のから手水。義経守本尊十一面観音。狩野古法眼之筆。義経御座間。欽喜天、よしつね箭竹。よしつね駒繋松。勝手大明神。シズカ御前ホウ楽ノ舞ヲ被成候處ナリ、又袖ふりの山とも云。虎の尾ノ桜アリ、竹林ニアリ。夫より竹林院へ参詣。ひさくら。杜丹桜。江戸桜。清明の瀧よしの山ニアリ。尤五丈、腰うちなしニアリ。実正院ハコタイコ天王ノ間。吉野山金ノ鳥居ノ上、さご屋平右衛門方へ宿。

十二日 宿出立。夫より一里程参り、上市の川ヲ渡り、上ミヲ見れば妹背の山、向ニ見ゆる。夫よりちまた村坂本屋清次郎茶屋へ寄休。夫よりとふの峯道通りへ行。女中方ハ岡寺へ被参る。夫より龍在村茶屋ニ依リ、米と麦との角力飯三椀たへ、至極塩梅よし。とうの峯四間茶屋木屋五兵衛ニ休ス。夫より塔ノ峯ニ参詣、莨ノ水鉢買入（五寸）。

和州多武ノ峯より下向。夫よりおか寺へ参詣ス。庭ノ苦ルリ井戸アリ。奥の隠アリ。夫より橘寺へ参詣。尤日本佛法最初ノ地ナリ。此寺本尊観世音菩薩、聖徳太子ノ作ナリ。前ニ勅願所アリ。右近ノ

多武峯

岡寺
橘寺

おか村へ出ル、同所上田屋孝助へ泊ル

夕膳　朝膳

同十三日 朝同所出立。曇天。夫より飛鳥井ノ宮へ参ル。本社大日本市命・伊勢両社、其外末社多し。伊勢之元宮之由申候。夫十四(より脱カ)・五丁行、みなみ村。南村より北ニより天ノかく山有り。天の岩戸ト云有り。うそか誠か不相分。夫より十町計行、小屋之茶屋ニ休ム、山田村也。夫より十余町計三輪之方へ行道より西ノ方へ天のかく山見ゆる。同所寄りニ住吉山見ゆる。

夫より三輪町、鳥井ノ前ニ茶屋有、高田屋へ休ム。中飯したゝめ三輪大明神へ参ル。大鳥居より弐鳥井迄凡三町余。道より左ニ若宮有り、寺也。本尊十一面尊也。夫より本社へ参ル道々杉木の大木有り。本社ハ拝殿広してみす向三段ニかゝる。後ロへ廻リ本社有り、但し本社へ不入。三ツノ鳥居とハ本社門之事也。昼前ニ皆々参詣、昼後又々百弐拾銅備へ、御神楽ヲ上ル。下社人弐人當番と相見相詰ル。神楽男子同乙女両人参リ神楽ヲ備ル。文助・万五郎・平作・政蔵四人参ル。各々へ鈴いたゝかす、御神酒も本社前ニて頂戴ス。

夫より初瀬へ参ル。三輪より壱里計行、おいわけへ出ル。又六・七丁行、岩崎へ出ル。同所万十ノ名物

飛鳥坐神社

安部文殊院

三輪明神

名物素麺

饅頭

長谷寺

橘、左近ノ桜アリ。聖徳太子ノ誕生ノ地なり。又日本初リ石塔籠アリ。又三光石アリ。此橘寺ハ以前の都地なれば臼石アリテ尊尚幽深ニ見ゆる。岡村上田屋藤助方へ旅トリ。

十三日　宿立。十三日飛鳥居大神宮参詣。神前ワキ恵比寿石アリ。神備山飛鳥井催馬楽、あすかいにやとりはすへし　おけかけもよし　ミもひもまむしみもくさもよし。南村、三笠山アリ。山田村、夫より。安部ノ文珠尊、乗応之石窟者仁明天皇御宇、右此地へ参詣して。茶屋弐町も上りて西ヲ見れハ天のかく山アリ。又住吉誕生被成候処アリ。夫よりニヲウ村通り、さくら井村見通る。

夫より三輪村へ行、三輪大明神参詣ス。又若宮御誕生処ナリ。ワキニ三重ノ塔アリ、又池アリ、其社地古サビ深奥ニ見ゆる。夫より下向、麓鳥居ワキ三軒茶屋ノ一高田屋勘兵衛方へ寄リ中飯認。又名物素麺たべる。又其茶屋ニ遊女同様成ものアリ。夫よりおい分、夫より墨(黒)崎曼頭茶屋依りたべ。銘物あん梅よし。

夫より初瀬へ参、鳥居アリ、是者吉野金鳥居位ニ見ゆる、尤木ナリ。宿を七ッ時ニとり、観音様へ参詣ス。同寺中ニ紀貫之古里の梅アリ。長谷寺歌に、いくたひも　参る心ハ　初瀬寺　山もちかいも　ふかく有り、松屋ニて休、まん十皆々たべる。夫よりはセへ出ル、凡三十丁程有。大鳥井、町ノ入口ニ有り、町内長サ凡六・七丁程有り。凡(ママ)町中之しきた屋七兵衛茶屋ニ泊ル。夫より観音寺へ参ル。杉山よろしき杉多し。天満宮江参ル。夫より観音様之方へ廻リ参ル。寺々坊々ヲヒタヽシ、古所ハ申ニ不及至而霊地也。

宿賄

皿（袁ビタシ／しほさあら／葉さんせう竹の子）　汁（みそ）　ちさ

菓子椀（青身／かすてら玉子／しいたけ）　御飯

小皿（かうもの／せうがの梅つけ）

十四日　朝（こませうゆ）

ちよく（したし／ちさ）　汁（みそ）　青身

菓子椀（ふき／つくねいも／こゝりとうふ）　御飯

小皿　かうのもの

き谷川。天満宮へ参詣ス。其地ニアリシモノヲ記ス。大玉命処産掌石、くつがたいし、天照大神宮向鵜形石、千度廻リ石アリ。夫よりハ□□姥しきた屋七兵衛方へ宿とり泊ス。

名張

十四日 同宿出立。青越通リ行ク。萩原村江戸屋ト云茶屋ニ依リ休息ス。夫より山辺村中屋藤左衛門茶屋ニ依リ休ス。其茶屋向ニ弘法大師ノ一夜ノ作、子安濡地蔵大菩薩アリ。夫より春泉作石佛五尺四寸、又室尾山右ニアリ。寺院ハ慈尊院と云、又焼佛身替リ地蔵アリ。夫より三本松へ参り、茶屋橘屋文次郎ト云ノニ依リ中飯認ム。夫より長瀬村通り、夫より奈波里村へ着シ、矢川屋藤兵衛方へ宿取リ泊リ。

阿保

十五日 同宿出立。是ハとり分早朝ニ御座候。夫より新田村井筒屋ニ依リ休息ス。夫より青村茶屋ニ依リ休息ス。ソレヨリ夫より川を上り、原村ヲ通リ、夫より伊勢地紅葉地屋へ寄中飯認ム。尤料理ノ次第、猪口したし、煎しめ竹の子・ぜんまい・握子芋、皿アイ、至極安絶よし〳〵　夫より賀伊ど村通り、夫より上ミの村通り、夫より中の村中田屋忠内方江宿とり泊。

伊勢路

十六日 同所出立。夫より川を渡り岡村ヲ通り、白山明神へ拝ス。夫より夫より二本木徳田屋平兵衛茶屋ニ依リ休ス。夫よりおゝの木村川渡ノ処ニ休。夫

垣戸

二本木

たへま　吉五郎
同　和助

十四日 同所出立。半里計行、茶屋ニて休、立場庄作ト云。夫より萩原へ出ル。茶屋ニて休、中屋藤左衛門宅。夫よりやまべの茶屋ニて休ム。夫より大野へ出ル。夫分レ道有り、弐丁行石ノミロク有。春日大明神并ニ利生権現ノツカハシメノ鼠出テ手伝ひ、石ノ面へミロクホサツヲ一夜之間ニキサミ給ふよし。川流有り、向之山ケンソナル石多シ。脇ニ寺有、慈尊院ト云、本尊地蔵尊身替之地蔵ト云。此寺ニて子定之御守リ出ル。御符子安帯ヲ受ル、但し十弐文也。其外様々之本尊多し。幽間之地也。其上ニ石ノ不動尊有り、ムナモトヨリ清水出ル、大師之御作之由。さひしき山中ゆへ往来之人多クよらす。夫より西南ニ当テ室尾山ト云山有り。此山大師之住給ふ地成よし。大師直作之大師有之由、是者往来より弐里寄り成故不行ス。

夫より三本松へ出ル。山見へかゝりニ三本またの松有り。是ニよりて名付物か。茶屋橘屋文次郎。

皿（煮びたし）　汁（みそ）
さあら　ちさ

八太
六軒
松坂
明星
小俣
山田
御師
松田与吉太夫

より川を渡り行く。夫より田尻村へ行、其よりはた村へ行く。尤橋を渡。村アリ、夫より小川、橋ヲ渡、同邑へ行、小野屋才兵衛と申茶屋ニ依中飯認。夫レ〳〵村アリ、六軒茶屋ニ依リ休、松坂へ行キ通ル。甚長キ道ナリ。夫より櫛田村へ行キ、川を渡り、色々村アリテ明星村へ行。おとわ屋と申宿を取り泊。皆々安休ス。甚道々面白事アリ。

十七日 同処出立。夫より村々アリテおはた村へ出、宮川ヲ渡リ又御ゴリヲトラセ伊勢山田へ着シ、御師松田氏へ止。何ソ用事認ム。夫より町内荒々見物ス。又松田へ帰リ、御膳ヲ給ヘ、其次第。

アワビ指身、白酒、鯛切身、吸物但しミ噌。

夕飯

汁　アラレ豆腐・葉付大根・椎茸。

一四寸　かうたけ・くわい・かまぼこ。

吸物魚ノ

一向　鯛焼物。

一香のもの　したし。

十七日夜与吉太夫ノ安室へ参リ対面ス。先つ茶菓子出、御茶給ル。夫より杯出ル、切掛鯛・硯ふたアワビ、ミルクキ芋。菓椀、素麺青ミ椎茸干瓢、陶へ鉢ニキウリ。夫より段々嘶し御帰り臥ス。

十八日 朝飯　汁青身氷り豆ふ。四寸、蒸鯛ワキビ但し敷苞。御飯。向詰ノ鯛焼物。香のもの。御酒。夫

菓子椀　竹の子（さんせう）　いも　いと大根　小倉ふ　御めし

かうのもの　御湯

同十四日 泊りなはり　やかわ屋

夕

皿　大こん　めうか　汁（みそ）　青葉

菓子椀　竹の子　あい　いも　御めし

小皿　かうのもの　ならづけ（こまセうゆ）

ちょく　したし

皿　やきもの

十五日 朝

ちょく　したし　御汁

椀　きりこんふ（きんせう）　ふき　糸玉子　御めし

かうもの

同十五日朝六つ半時出立、夫よりいセ地。昼飯もみ

より何□御廻致し、外宮・内宮へ参詣ス。夫より色々町内面白敷様子有之。下向、神主へ帰り、目出度悦笑ス。神山ノコトハ心意得覚ス。

夕飯、本段之次第、汁、鯛ムシリミニ青海苔。坪、午房ニタコノ切口。皿、キンカン（ケン）・岩茸・三島のり・大根・さしミ鯛・色付酢。四寸、切掛ノアワビ・茹子・初茸但ししき葛。向詰、鯛焼物。膳付、香のもの。二ノ膳、めうか汁スメ鯛切身。□松鰹魚ワサビ。猪口、シタシ生姜ハジキ。吸物、切身ニしゆんさい。外ニ取□なし。御酒をたへ相談、夫より種々咄し致し、夜餅イツル。

十九日　夜大雨。同続キ雨降り。晝より上り、町内歩行ス。中飯、四寸、しき葛ニとうふ。かいしき、三味漬ノ鯛。のり、香のもの。

夕飯、

汁　しそ・あられ
　　かんひゆう・椎茸
　　めうか口

皿　かすの玉こ
　　竹の子・れんこん

猪口　芋のクキ

夜酌　すまし
　　切身　酒

じ屋武左衛門。

ちょく　したし

皿　竹（にしめ）の子
　　センまい
　　つくねいも

御めし

引物　あい

同　からつけ　ミそつけ　梅干

夫よりあお越の山へかゝル。前壱里半ハ伊賀国分、後壱里半ハ伊勢領、西ノ峠伊賀の茶屋有り休ム。東峠ヲ越、伊勢領之茶屋有り、又此処ニても休。皆々まきヲたべる。西東へ三里之山也。谷川伝ひ登ル。卯の花、今ヲ盛と相見へ、山ノ南北共もみぢ・つげ多し。鶯・時鳥声ヲあらそふ深山也。

ほとゝきす　旅路のうさを　はらえとや
ミ山をつとふ　声ハいくこへ（のうちらか）

玉川の卯花をよめる。

白砂に　咲つゝきたる　玉川の
なみのいろそふ　岸の卯の花

初瀬寺に詣ふて、其里にとまりてよめる。

御佛の　ちかひに今そ　法りの通
行もとまるも　おはつセの山

おやまニ宿、村田（マヽ）屋忠内泊ル。

夕

鉢　鯛さし身・生姜木耳、それより色々談し致、ふせる。

廿日　夜ルより雨降ル。早朝に日影ヲ見る。最アリテ又雨降り。朝、茶の子ニ饅頭。夫より朝飯。

汁　青身　ゆは　坪　にし　氷ふ　皿　大根　たで　うを

四寸　山の芋　椎茸・ふ　かいしき香のもの

向詰　海老

弐のせん

すめ　鯛切身　こんふ　したし　小皿　さしみ　猪口付海苔の□し酢

猪口　ゆりね　青ミ

伊勢出立

廿日　四つ過　又々外宮御内拝見。夫より下向。伊勢ヲ出立、美濃屋伝右衛門トたは屋へ依リ、左之品相求ム。夫より櫛田村へ寄リ休ス。夫より松坂中ノ町大和屋与兵衛方ニ而宿ス

皿（にびたし）あい　汁（みそ）ちさ

菓子椀　やきとうふ　かすてら玉子　しいたけ　御めし

ちょく　したし

かうのもの　梅干

盃出ス

十六日　朝　小皿こゝより

煮豆　せうか　こんふ

菓子椀　松　竹　あけとうふ　御めし

ちょく　したし　かうの物　梅干

同十六日　朝六ッ時出立。夫より壱里計行、二本木与云処ニて休ム。夫より壱里計行、大の木村川渡之処ニて休。此処之川百姓橋ニて壱人ニ付弐文ツゝ取。東向へ渡り竹やふ有り、依而家見へす、竹こしニ人家有り。大の木村ノ茶屋也。夫より半里計行キ、村人家有り、なかの村有り。川有り、橋かゝり有ル。先へ行キハ八太（ハタ）村也。夫より小川茶屋ニて昼飯ス。宮前の茶屋也。夫より壱里半行、六けんニて休む。夫より松坂料理桜屋嘉助休ム。夫より先ノ小村ニて休ム。夫より明星迄三里半。馬かる、文助・

おみち・おうら三人乗ル。明星迄之間村々人家多し。岩本くした川、はらい川、数川、明星おとわ屋ニ泊ル。

夕　朝

同十七日　朝六つ半頃出立。夫よりおはた・宮川与追々順路凡弐里、山田町へ入。当町五丁目本町より立町へ入ル。松田与吉大夫殿江朝五つ半時頃着。

（二九頁より続く）

〔一九八六年度〕

易　素　玫「福沢諭吉の中国観」

金　泰　壽「『徒然草』における無常感とその周辺」

和　気　千穂子「松尾芭蕉の人間像――構造を中心にして――」

Willis Vaughan Phillip「日本実存主義文学論――椎名麟三を中心にして――」

〔一九八七年度〕

高　仁　海「夏目漱石論――後期三部作に見られる形容語彙を中心として――」

金　省　希「外国人のみた日本および日本人――幕末期ヨーロッパ人の観察――」

〔一九八八年度〕

陳　栄　開「朱子学と徂徠学との比較研究――聖人論をめぐる初歩の考察――」

加　土　恭　子「女性の呼称より見た『古事記』の言葉に関する一考察」

陳　紅「日本語の動詞についての研究――『を＋動詞』を中心にして――」

荒　木　一　視「農村の空間構造の研究」

袁　葉「川端康成作品研究――その『非現実』について――」

曽　秋　桂「夏目漱石研究――漢詩と小説のかかわり――」

ミウォスワフスキ・ヤロスワフ「道元禅の研究」